



「^み看せる板」の 表現力を磨いていく。

まるそう広告 桑島 圭

会社のマークは、桑島家の家紋（蛇の目）だ。



ある「あか牛料理店」の看板を引き受けることになったのは、その店が「これほどおいしいのに、お客が少ないのはもったいない、と痛感したからでした」。桑島圭^{はな}さんが腕を振るったデザインは、目を引くことと、何業であるか明快であることという看板の果たす役割に徹した、シンプルで力強いものだった。結果はみごとに出て、店は大繁盛となる。「看板屋冥利に尽きます」。🍌「まるそう広告」

のルーツは、祖父母が始めた文房具の行商だった。その後、化粧品や洋服を扱うようになり、看板業も手がけるようになったのは父の代からである。福岡の美術学校を卒業し、大手の屋外広告会社に入社してがんばっていた次男坊が、阿蘇に戻り、父とともに仕事するようになったのは、大きな流れに逆らわなかったということだろう。🍌ほとんど休日など返上でがむしやりに働いているうちに、軌道に乗り始める。デザイン力はもちろんだが、誠実な人柄が引き寄せた商運にちがいない。🍌阿蘇のまちが地震で被害を受けたあと、迂回路表示やゴミ集積所での分別表示など、「まちの機能」としての看板づくりに東奔西走した。看板とは、看せる板。インフォメーションそのものがメッセージを果たす。またひとつ、この仕事の使命と誇りを実感している。

人の力を
信じる。

阿蘇の誇りと実りのブランド

然
zen
A s o C i t y